

武庫川チャイルドスタディ 小学2年夏休み観察 レポート

今年の武庫川チャイルドスタディでは平成 27 年度に小学 2 年生になるお子さん 15 名を対象に観察を実施しました。現在小学 3 年生のみなさんが前の年に実施したものとほぼ同じ内容のものです。



小学 2 年生での観察は、主に検査と観察の 2 つを行います。検査では、絵を見ての説明・計算・積み木・パズルや迷路など、さまざまな課題に取り組みます。全体で 1 時間半程度の検査にがまん強く取り組むことができました。難しい問題が出ても何とか答えを出そうと考えたり、分からないことは分からないと伝えられたり、何より目の前の課題に集中して取り組むという姿勢からお子さんの成長を感じることができました。

そのあとジュース休憩を挟み、約 30 分の観察を行いました。絵や文字を書いたり、なわとびや紙風船を使って体を動かす運動をしたりしました。そこでは一生けんめい地図を描いて学校までの道順を説明してくれたり、紙風船に夢中になって取り組む姿が見られました。



お母さまには、お子さんが検査をしているあいだに、ふだんのお家でのようすをお伺いしました。今年は宿題などの計画を自分で立てるのが難しい、お友だちとの付き合い方が難しいといった意見が多く

聞かれました。

ところで、今回実施した検査は、知能検査と呼ばれる種類のもので、知能検査、というように聞くと、何か難しいものようですが、これは、お子さまが課題に直面したときの対処方法にどのような傾向があるかを明らかにするものです。今回は、このようなお子さまの特徴や傾向をまとめ、簡単なお報告を近日中にさせていただく予定です。報告をご覧いただき、疑問やご相談がございましたら、どうぞご遠慮なくお知らせください。

そして、今回新たな試みとして「唾液測定」を行いました。唾液のなかにあるアミラーゼやコルチゾールといった物質は身体が緊張を感じたり、リラックスしたりするのに対応して分泌の状態が変化することがわかっています。ですから、これらの物質を測定することで、お子さまがどのようにストレスに対処しようとしているのか、その一端がわかるのです。今回は、緊張した状態として観察室に来てもらった時に計測し、リラックスした状態として家で過ごしているときに計測をお願いしました。この測定は私たちにとってもチャレンジングな試みでしたので、専門の小花和 W. 先生のもと実施しました。

測定にあたっては、ご自宅で「採取前にごはんを食べてしまったけどどうしたらいいの?」とか「配送の際に採取した唾液をスムーズに配送できない」といったトラブルも発生し、ご迷惑をおかけしましたことお詫び申し上げます。簡単に採取し配送していただけるような手順の見直しも、次回に向けて考えていく予定です。

みなさまにはお忙しいなかご自宅での採取もお願いしたのですが、なんと、今回お越しいただいた方全員がご協力の意志を示してくださいました! いただいた唾液サンプルは分析会社にて解析後、おひとりずつの簡単なレポートをお送りする予定です。来年、小学 4 年生で武庫川チャイルドスタディにお越しいただく方は、同様の検査をご案内する予定です。よろしくお願いいたします。

※掲載を承諾していただいた方のお写真を使わせていただいています

お口にスポンジをふくんで、
唾液測定中



今後の予定とお知らせ

平成 28 年度 1 月～ 12 月までの研究スケジュール

『すくすくコホート三重』では、小学 5 年生、4 年生を対象に、3 学期に郵送による質問票調査を予定しております。ご自宅へ質問票を送らせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

また、同時期に、今年は小学 5 年生を対象に唾液を採取する研究もご案内させていただきます。こちらはご協力いただける方のみとなりますが、三重中央医療センターまでお知らせください。詳細は後日、ご案内させていただきます。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
小学 5 年生	郵送によるアンケート		唾液調査 (オプション)	(進級)								
小学 4 年生	郵送によるアンケート			(進級)								

『武庫川チャイルドスタディ』では、小学 3 年生を対象に、3 学期に郵送による質問票調査を予定しております。記念品もございますので、ご協力くださいますようよろしくお願いいたします。

大学での観察は平成 28 年夏休みに小学 4 年生(現時点 3 年生)を対象に計画しております。先の予定になりますので、学年が上がりましたらご案内させていただきます。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
小学 3 年生	郵送によるアンケート			(進級)				小学 4 年夏休みに観察を実施 (予定)				
小学 2 年生				(進級)								(小学 3 年生の 3 学期に郵送によるアンケートを実施します)

転居などでご住所や連絡先が変更になった方は、お手数ですが各研究グループへご連絡ください。遠方へ転居の場合も質問票のみでもご協力を継続していただけると幸いです。引き続きご協力くださいますようよろしくお願いいたします。

編集後記

今回のニュースレターでは、新たに 3 年間の国の研究予算が取れたことで研究を継続していくことができるお知らせをいたしました。一番早い三重グループの方で、これまで誕生から数えて 11 年間もこの研究にご協力いただいていることとなります。長期間の研究のなかではわれわれも同時に年を取り、研究チームのメンバーが変わることもございますが、みんな子どもが大好きで、子どもの成長を見ていきたい、日本の子どもたちの未来に役立つ研究がしたいという強い思いで携わっております。

お送りしているこのニュースレターでも、2 地点での研究についてご紹介させていただいたり、役に立つ様々なコラムを充実できるようにしていきたいと考えております。



【すくすくコホート三重】

〒514-1101 三重県津市久居明神町 2158-5 三重中央医療センター 臨床研究部内
TEL: 059-259-1211 (代)

【武庫川チャイルドスタディ】

〒663-8558 兵庫県西宮市池開町 6-46 武庫川女子大学 子ども発達科学研究センター
TEL/FAX: 0798-45-9880 Email: info@childstudy.jp

この研究は文部科学省の日本学術振興会 科学研究費補助金(課題番号 15H03453)から研究支援をいただいています。



SUKUSUKU COHORT NEWS LETTERS

すくすくコホート

平成 27 年度号

ニュースレター



すくすくコホート三重・武庫川チャイルドスタディ

研究統括からのご挨拶 ニュースレター平成27年度号よせて 研究統括 河合 優年

あっという間に今年も師走を迎え、残すところわずかとなりました。小学校では2学期が終わりに近づき、3学期という1学年のまとめの時期をそれぞれが迎えようとしているのではないのでしょうか。今年の『武庫川チャイルドスタディ』では、観察のご案内を差し上げた方ほぼ全員に観察にご参加いただき、みなさまのこの研究への意欲や期待をスタッフ一同感じる夏休みとなりました。改めてこの場をおかりしてお礼申し上げます。

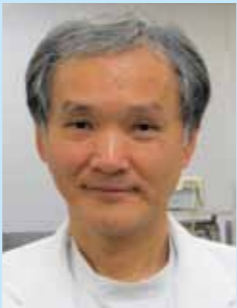
昨年度には、ご協力いただいている方の全員が小学生になり、今年度は『すくすくコホート三重』のお子さまたちが小学5年生と4年生、『武庫川チャイルドスタディ』のお子さまたちが小学校3年生と2年生になりました。とくに、私が直接お会いする機会のある『武庫川チャイルドスタディ』のお子さまたちは、この夏休みにも大学での観察へお越しいただいた方もおられます。久しぶりにお会いする子どもたちは、個性もしっかり現れるようになり、学校という環境の中でも社会的な関係をうまく作り出せるようになってきています。仲間関係を中心とした、児童期後半の社会性は、私どもの研究テーマそのものでもあります。子どもの個性の発達を、誕生から連続して追跡させていただくことによって、これまで分らなかった環境との関係が明らかになってくるものと期待しています。

さて、平成27年度の調査をすでに終えられた方もいらっしゃると思いますが、これからの研究スケジュールと研究体制について少しお話しさせていただきたいと思えます。まずご報告としては、国へ申請していた新しい研究予算を獲得することができ、平成27年度から3年間でこれまでの調査を継続していくことが決定しました。『武庫川チャイルドスタディ』はこれまでと同様に2年に一度ほどのペースで大学へお越しいただく観察と、年1回の郵送による調査を予定しております。『すくすくコホート三重』にご協力いただいているみなさまへはご連絡が遅くなり、たいへんお待たせしました。昨年度に実施した郵送調査のご返信のなかに「『すくすくコホート三重』がずっと続くことを希望している」というコメントをいくつも見つけ、なんとか継続させたいという思いが強くなりました。『すくすくコホート三重』については若干の体制変更があり、これまで三重で研究調整を主導してきた山本先生(グループリーダー)、分析担当の田中先生が中心となり、主として郵送による質問票調査を進めていく予定です。もちろん、何かお困りのことがあれば、これまでどおり三重中央医療センター臨床研究部でのサポートも行っておりますので、お気軽にご連絡いただければと思っております。

ところで、少し前のお話しになりますが、この秋も日本人のノーベル賞受賞に世間が沸きました。ニュートリノの質量を発見し、今年、ノーベル物理学賞に輝いた東京大学の梶田隆章先生はインタビューのなかで「(自分の受賞が)基礎研究の分野にとって弾みになれば」と語っておられたことが印象に残っています。科学技術の関心が基礎研究からすぐに実用化・資金化できる応用研究へシフトする中、ノーベル物理学賞の授与が決まり、あらためて基礎研究の大切さが脚光を浴びています。みなさまにご協力いただいているこの研究も、基本的な情報を長い時間をかけて集める基礎研究の部類に属します。みなさまの協力のもと地道な努力とたくさんの時間が必要で、すぐに結論や成果に結びつかないようなもどかさもありますが、子どもたち、日本の育児や教育にとって将来役に立つものとなるよう、わたしたち研究チーム一同、努力を続けていくつもりです。



田中滋己



ことがわかるのか、どのようにして参加できるのか、詳しくは3学期に質問票をお送りする際にお知らせしたいと思います。わたしたちの研究にご参加いただいたみなさまの貴重なデータは、今後の日本の子どもたちの発達をサポートしていくうえで重要な資料となると考えています。どうか引き続き『すくすくコホート三重』の調査研究にご協力をお願いいたします。

すくすくコホート三重から研究協力者のみなさまへ

『すくすくコホート三重』でのコホート研究にご協力いただいているみなさまに、この度は新しい調査についてお知らせいたします。わたしたち研究グループは平成27年度から3年間、国から新たな研究費を得て新しい調査活動をスタートします。今回の研究では三重中央医療センター臨床研究部の山本、田中が調査を担当いたします。具体的な調査の方法は、アンケートを郵送し、みなさまから回答を返送していただくことが中心となります。また、今回は併せてお子さまの唾液の調査も計画しています。これはストレスがかかったときに身体がどのような反応を示すのかを調べるためのものです。どんな

Column

こんなとまどうするの？

● 小学校での友人関係について

この研究にご協力いただいているお子さんたちが小学5年～2年生になり、毎年、観察や質問票をご返送いただいたお母さんからは、学校での子どもたちの友人関係について関心が高くなっているように感じます。

昨年度のニュースレターでは、お子さんがいわゆるギャングエイジと呼ばれる仲間関係が重要な時期にさしかかり、これまで直接的でもよかった言葉のやりとりも、その場面に適した形を見つけ表現する方法を見つけていかななくてはならなかったり、円滑な仲間関係を築くために時には我慢する力が必要だったりすることをお話ししました。

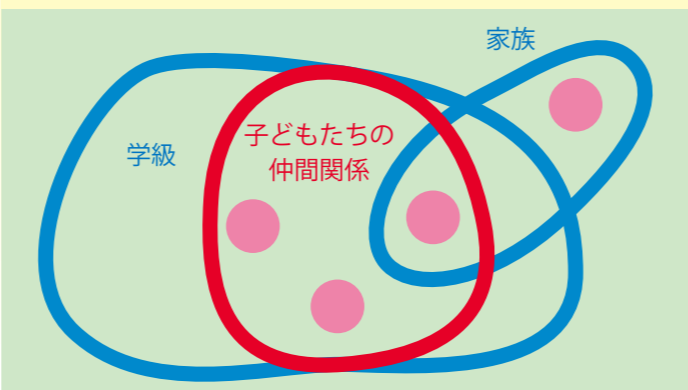
今回は、もしお子さんが学校での友人関係にトラブルがあると感じる場合の対処方法について、ここではごく一般的な回答になりますが、どのように対処したらよいか考えてみましょう。

例えば、こんなことがあったとしましょう。小学校高学年のお子さん。最近になってクラスの特定の友達数名から意地悪をされていることをお母さんに打ち明けてくれました。もともと勉強もでき快活で、クラスでは目立つタイプでした。最近変わったことと言えば、中学受験のために塾に通い始め、以前のように友達と過ごす時間が少なくなったことです。

おさんはきちんと学校に通っていますが、意地悪をされているのは間違いないようです。今後、お子さんのストレスが大きくなるか心配です。

● 子どもを取り巻く環境はとても複雑です。

子どもを取り巻く世界(生活空間)は小学校に入るとぐんと複雑になってきます。関係性も一人ひとりの性格などが関係していて読み解くことは簡単ではありません。さらに、学校内での問題になるとよけいやこしくなります。子ども一人ひとりとは別の関係性を持っていて、それらはさらに別の集団の中に位置づいており、その中で期待される行動や関係性が作られるのです。



ですから、家庭で子どもが快適であっても、学校に行くとしんどいということもあるのです。このような複雑な関係性を読み解くには多くの情報と時間が必要です。

● 様子をみてもよい場合

このようなケースの場合、大きくふたつの可能性が考えられます。まず少し様子をみてもよいと判断される場合があります。

意地悪をされるというのは、具体的にはどのようなことでしょうか。口をきかないとか近くに行くとそっぽを向いてしまうということだとするとしばらく様子をみてもよいと思います。お子さんは意地悪をしているお友だちと、もともと交友関係があって、仲が良かったのかもしれません。そのような場合に、何かのきっかけで一緒に過ごす時間が少なくなり、まだ子どもゆえにコミュニケーションがうまくいかず、お互い勘違いを起こしていることも考えられます。ひょっとすると、塾通いが始まったことで、その子どもたちと遊ぶことが少なくなった、もしくは学校外での交流がなくなったのではないのでしょうか。お子さんが快活な性格なら、遊ぶという誘いにもあまり深く考えず、「ダメ」という結果だけを伝えているのかもしれません。そうだとすると、仲間関係を確認したい、持続したいのということからの行動である可能性が高くなります。「最近つめたいよな!」という感じの意思表示の可能性があるのです。そのことに関してお子さんも「つまらなそう」「不満そう」ならば、どうしてつまらないのかを聞いてみてください。もし、前はよく遊んでいたのだけれど塾に行くようになって遊べなくなっている、ということでしたら、お友達との時間も少し持たせてあげてもよいかもしれません。

● 担任の先生に伝えたいほうがよい場合

もうひとつの可能性は、学級内にいじめを誘発するよう何かがあって、そのはけ口としてお子さんがターゲットになっているという場合です。この場合は、今は本人も無視できている意地悪が、身体的にも心理的にも耐えられない大きなものになる前兆である可能性があります。もしその可能性があるならば、直ちに担任の先生にお子さんが少しストレスを感じているということをお伝えなければなりません。学校の先生たちはこのような問題にどのように対応すればよいかを知っています。ですから、言いつけるのではなく、少しだけ注意して見守っていただけませんかというような、お願い的な伝達を最初はするとよいです。とにかく、関係している子どもたち全員を見ている先生に、状況を知っておいてもらうことが大切でしょう。

さて、もしこれまであまり関係のなかった子どもたちまでも意地悪をし始めたということでしたら、意地悪の程度と、そのときの周りの子どもたちの様子を聞いてみてください。意地悪といじめの線引きはとても難しく、

子どもたちが悪意のない遊びの延長線と考えてしている意地悪的な行動も、周りの子どもたちがはやし立てると、集団の力が働いて当事者にとって取り返しのつかないダメージを与えることになります。いじめにつながる可能性はできるだけ早い段階で介入することが重要です。こ

れは専門家の判断が必要なので、やはり先生に相談するのがよいと思います。

この種の問題は、将来の大きな問題の小さな芽であることもあります。お母さまがひとりであまり難しく考えすぎないで、担任の先生に相談されるのがよいと思います。

Column

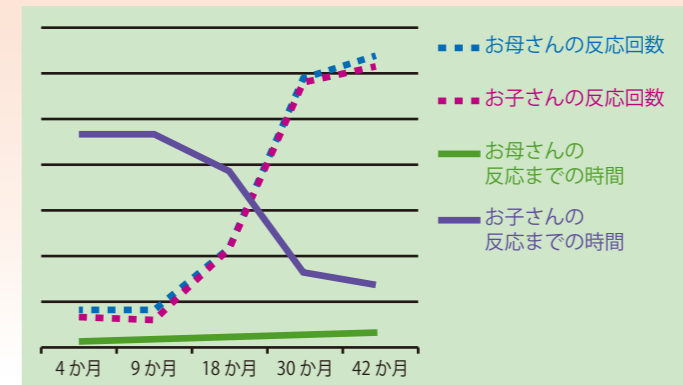
ご参加いただいている研究から分かってきたこと

この研究を進めていく中で、様々な興味深いことが分かってきています。今回は、今年イギリスで開かれた国際学会で発表した結果について、ご報告させていただきたいと思えます。

もうずいぶん前のことですが、最初に観察室に入っていた後、おもちゃをお渡しし、「いつも通りのやり方でお子さんをリラックスさせてあげてください。」「いつも通り遊んであげてください。」「というような場面を設けていました。みなさまは覚えていらっしゃるでしょうか?この場面では、あまりなじみのない場所でおもちゃを介してお母さんとお子さんがどのようなやり取りをするのかを見せていただきました。その中からお子さんとお母さんの音声的なやりとり(ことばを含む発声によるやりとり)が、発達するにつれてどのように変化するかを今回検討しました。

下のグラフには反応回数(一定時間内に何回音声を発したか)と反応までの時間(相手の発声の後で音声で返事する)の月齢による変化を示しました。ちょうど中央の18か月から30か月のところで線が交差しているのがわかります。この時期に音声でのやりとりに大きな変化があることを示しています。詳しくみると母子ともに反応回数がぐんと増えていますので、音声でのやりとりが増えていることがわかります。一方で、子どもの反応までの時間が急激に短くなっていきます(お母さんは変わりません)。

これは、お母さんはどの月齢でも子どもが声を出すとすぐに返事をするのですが、子どもがお母さんからの声にすぐに応えだすのは30か月(2歳半以降)ごろからであることがわかります。つまり、30か月(2歳半)前後に母子関係の質が変わるということが分かってきたのです。ここでの変化のポイントは言語の出現ということになります。このころに、子どもは親の言う事が分かるようになり、



発話も活発になります。対話が成立し始めるのです。このような現象は実際の子育て経験とも一致しているため、なるほどそういえば3歳ごろからいろいろと話し出したよね、と思われる方も多いのではないのでしょうか。

さて次に、図に示した行動と質問票でお伺いしている子どもたちのようすのうち、大人とのやりとりに関する項目とに関連がみられるか検討しました。すると、なんと6歳時点での大人との社会的なやりとりと、18か月・30か月のときの母子の反応回数とに関係があることが分かってきたのです(18か月(1歳半)、30か月(2歳半)、42か月(3歳半)の大人との社会的なやりとりの状況とは関係が見られませんでした)。ちなみに反応までの時間については、母子ともにすべての月齢において、大人との社会的なやりとりとの間に関係が見られませんでした。つまり、18か月(1歳半)から30か月(2歳半)にかけて、身近な大人と直接のやりとりが成立し、会話の経験をたくさんしたことが、その4年後の大人との社会的なやりとりの良さを予測する可能性が見えてきたのです。子どもの発達研究ではこのような一定の潜伏期間ともいえる期間を置いて関係が見えてくることはあまりない事柄なので、多くの研究者の興味を引いています。

私たちは、子どもに対して何か働きかけをすると、すぐにその効果が出て来るのではないかと考えがちです。しかし、今回の結果は、働きかけた後、時間をおいてその効果が出てくる可能性があることを示唆しているのです。「子どもの成長を長い目で見てやってほしい」という言葉がありますが、この国際学会で発表した結果は、そのような考え方が一定の正しさを持っていることを示してくれたようにも思っています。

このような潜伏期において効果が見えてくるような現象は、短期的な研究からは見えてこないものであり、10年にわたるみなさまの協力があってこそ発見できたのだと思います。この研究は、ようやく小学校高学年での仲間関係や学校での活動と乳幼児期の行動との関係解明に近づいてきています。今回の成果報告はその一部ですが、これからもこの研究からわかってきた事柄をご報告していきたいと考えています。